古　文

一　次の文章は、中世の文芸評論『無名草子』の一節で、若い女房が老尼に、男女の入れ替わりの物語である『今とりかへばや』という物語について語っている場面が描かれている。よく読んで、後の問に答えなさい。

げに、『源氏』よりはさきの物語ども、『うつほ』をはじめてあまた見てはべるこそ、皆いと見どころ少なくはべれ。古体にし、古めかしきはA<u>ことわり</u>、言葉遣ひ、歌などは、(ア)<u>させる</u>ことなくはべるは、『万葉集』などの風情に、耳及びはべらぬなるべし。

など、ただ今聞こえつる『今とりかへばや』などの、もとにまさりはべるさまよ。(注1)何事もものまねびは必ずもとには劣るわざなるを、(イ)<u>これは</u>、いと憎からず、をかしくこそあめれな。言葉遣ひ、歌なども悪しくもなし。B<u>おびたたしく</u>、恐ろしきところなどもなかめり。

もとには、女中納言(注2)のありさまいと［　X　］に、これは、何事もいと［　Y　］こそあれ。かかるさまになる、［　Z　］けしからぬ筋にはI<u>おぼえず</u>、まことにさるべきものの報いなどにてぞあらむ、と推し量られて、かかる身のありさまをいみじく口惜しくII<u>思ひ知りたる</u>ほど、いとC<u>いとほしく</u>、尚侍(注3)もいとよし。中納言の女になりかへり、子生むほどのありさまも、尚侍の男になるほども、これはいと［　Y　］こそあれ。もとのは、もとの人々皆失せて、いづこなりしともなくて、新しう出で来たるほど、いとIII<u>まことしからず</u>。これは、かたみにもとの人になり代はりて出で来たるなど、かかること思ひ寄る末ならば、(ウ)<u>かく</u>IV<u>こそすべかりけれ</u>とこそ見ゆれ。

四の君ぞ、これは［　X　］。上はいとおほどかに、らうたげにて、

【あ】春の夜も見るわれからの月なれば心尽くしの影となりけり

と詠むも、何事の、いかなるべし、と思ひて、さばかりまめに分くる心もなき人を持ちながら、心尽くしに思ふらむ、と思ふだに、おいらかならぬ心のほど、ふさはしからぬを、

上に着る小夜（さよ）の衣の袖よりも人知れぬをばただにやは聞く

と詠みたるこそ、いと［Z］けれ。

注1　もと――『今とりかへばや』の原作本のこと。

注2　女中納言――尚侍の妹だが、男として育ち、右大臣の娘・四の君と結婚する。

注3　尚侍――女中納言の兄だが、女として育った。

問一　傍線部A～Eの解釈としてもっとも適切なものを、それぞれ次の中から選んで、番号をマークしなさい。

A　1　あってはならないことで　2　当然のことで　3　望ましいことで　4　拒絶したいことで

B　1　大げさで　2　襟を正したくなるようで　3　あまりに長くて　4　気色が悪くて

C　1　聡明で　2　愛らしくて　3　物欲しそうで　4　気の毒で

D　1　健康的で　2　尊敬できて　3　浮気っぽくて　4　誠実で

E　1　すなおに　2　容易に　3　平静に　4　じかに

問二　二重傍線部(ア)～(ウ)の解釈としてもっとも適切なものを、それぞれ次の中から選んで、番号をマークしなさい。

(ア)　1　古めかしい　　2　『万葉集』に似ている　　3　筋が通っている　　4　優れている

(イ)　1　女中納言のありさま　　2　言葉遊び、歌など　　3　『今とりかへばや』　　4　『源氏物語』

(ウ)　1　男も女も両性を身に付けること　　2　男と女が一緒に消えること

3　男が女に生まれ変わること　　4　男と女が性役割を交換すること

問三　波線部Ⅰ～Ⅳの主語を、それぞれ次の中から選んで、番号をマークしなさい。

1　女中納言　　2　四の君　　3　若い女房

4　老尼　　5　『今とりかへばや』の作者　　6　『今とりかへばや』の原作本

問四　X ～ Z に入る、もっとも適切な語を、それぞれ次の中から選んで、番号をマークしなさい。

X　1　よき　　2　にくき　　3　らうたき　　4　あだめかしき

Y　1　めづらしく　　2　わろく　　3　むつかしく　　4　よく

Z　1　いみじ　　2　かねて　　3　うたて　　4　さだめて

問五　四の君の和歌【あ】の解釈としてもっとも適切なものを、次の中から選んで、番号をマークしなさい。

1　自分が思い悩んでいるせいで、いつもより長く感じられる春の夜の月がいまいましいことだ。

2　自分が勝手に思い込んでいるせいで、春の夜の月も秋と同じく、美しく見えることだ。

3　自分があまりにこだわるせいで、春の夜の月はひどく思い悩んでいるように見えることだ。

4　自分が落ち込んでいるせいで、春の夜も秋の夜同様に、月があれこれと物思いをさせることだ。

問六　次のａ～ｆに関して、若い女房が『今とりかへばや』について語っている内容と合致するものには1を、合致しないものには2をマークしなさい。

ａ　和歌・言葉遣い・内容が原作より劣っている。

ｂ　登場人物全員が、いったん行方不明となる。

ｃ　女中納言は自らの運命を残念に思っている。

ｄ　四の君は見かけによらずおだやかでない性格だ。

ｅ　尚侍は中納言とのあいだに子をもうけた。

ｆ　四の君は夫のほかに好きな人がいる。

二　次の文章をよく読んで、後の問に答えなさい。

まだ夜ふかきほどの月さしくもり、木の下をぐらきに、「御格子[a]まゐり（ア）なばや」「女官はいままでさぶらはじ[b]」「蔵人、まゐれ」など、いひしろふほどに、後夜の鉦うちおどろかして、五壇の御修法（注1）の時はじめ[A]つ。われもわれもとうちあげたる伴僧の声々、遠く近く聞きわたされたるほど、おどろおどろしく、たふとし。

観音院の僧正、東の対より、二十人の伴僧をひきゐて、御加持まゐりたまふ足音、渡殿の橋の、とどろとどろと踏[B]み鳴らさるるさへぞ、ことごとのけはひには似ぬ（イ）。法住寺の座主は馬場の御殿、浄土寺の僧都は文殿などに、うちつれたる（ウ）浄衣姿にて、ゆゑゆゑしき唐橋どもを渡りつつ、木の間を分けてかへり入るほども、はるかに見やらるる心地して、あはれなり。さいさ阿闍梨も、大威徳をうやまひて、腰をかがめたり。人々まゐりつれば、夜も明けぬ。

渡殿の戸口の局に見いだせば、ほのうちきりたるあしたの露もまだ落ち[C]ぬに、殿ありかせたまひて、御随身召[c]して、遣水はらはせたまふ。橋の南なるをみなへしのいみじうさかりなるを、一枝折らせ（エ）たまひて、几帳の上よりさしのぞかせたまへる御さまの、いと恥づかしげなるに、わが朝がほの思ひしらるれば、「これ、おそくてはわろからむ[d]」とのたまはするにことつけて、硯のもとによりぬ。

をみなへしさかりの色を見[D]るからに露のわきける身こそ知らる（オ）れ

「あな疾」とほほゑみて、硯召しいづ。

白露はわきてもおかじをみなへしこころからにや（カ）色の染むらむ

（『紫式部日記』）

注1　五壇の御修法――中央及び東西南北の五つの壇に、それぞれ五大明王をまつり、息災・調伏・安産などを修する大規模な加持祈祷。中宮彰子の安産を祈願して行われている。

注2　殿――藤原道長のこと。紫式部は、出産の為、里下がりした中宮彰子とともに、道長の邸宅（土御門邸）にいる。

問一　太線部A～Dの動詞の活用の種類を、それぞれ次の中から選んで、番号をマークしなさい。

1　四段活用　　2　上一段活用　　3　上二段活用　　4　下一段活用　　5　下二段活用

問二　点線部［a］～［d］の動詞の敬語の種類としてもっとも適切なものを、それぞれ次の中から選んで、番号をマークしなさい（重複解答可）。

1　尊敬　　2　丁寧　　3　謙譲

問三　傍線部（ア）～（カ）の助動詞の活用形と意味としてもっとも適切なものを、それぞれ次の中から選んで、番号をマークしなさい。

（ア）　1　未然・過去　　2　未然・完了　　3　連用・過去　　4　連用・推量　　5　已然・完了　　6　已然・願望

（イ）　1　終止・過去　　2　終止・完了　　3　終止・打消　　4　連体・過去　　5　連体・完了　　6　連体・打消

（ウ）　1　連用・過去　　2　連用・存続　　3　終止・過去　　4　終止・完了　　5　連体・完了　　6　連体・存続

（エ）　1　未然・尊敬　　2　未然・受身　　3　未然・謙譲　　4　連用・尊敬　　5　連用・受身　　6　連用・謙譲

（オ）　1　終止・尊敬　　2　終止・自発　　3　連体・尊敬　　4　連体・受身　　5　已然・使役　　6　已然・自発

（カ）　1　未然・完了　　2　未然・断定　　3　連用・完了　　4　連用・断定　　5　已然・過去　　6　已然・詠嘆

問四　問題文に出てくる和歌の中の「をみなへし」は植物名であるが、これと同じ季節の植物として和歌に詠まれるものを、次の中から二つ選んで、番号をマークしなさい。

1　卯の花　　2　菊　　3　山吹　　4　薄　　5　柳　　6　橘　　7　藤　　8　菖蒲

問五　次の文章中の［X］～［Z］に入る作者を、それぞれ後の選択肢の中から選んで、番号をマークしなさい。

問題文の『紫式部日記』は、藤原道長の要請で書かれたと言われるが、中宮彰子のもとでの宮仕え生活を中心に、彰子の出産や祝賀などが記録されている。平安時代の日記文学作品としては、これ以外にも、［X］が土佐から都に帰るまでの旅を記した『土佐日記』をはじめ、［Y］が夫兼家との結婚生活を描いた『蜻蛉日記』、少女時代に『源氏物語』を愛読し、夢見がちな思いを抱きながらも現実に目覚めてゆく様を綴った、［Z］の『更級日記』など、様々な内容のものがある。

1　源順　　2　菅原孝標女　　3　紀貫之　　4　清少納言

5　赤染衛門　　6　藤原道綱母　　7　伊勢　　8　鴨長明